

演題名: 腰痛患者における腰椎棘突起肥大についての検討

清泉クリニック整形外科

今関 礼章 内田 繕博 嵩下 敏文 渡邊 純 脇元 幸一

【はじめに】

近年、体幹伸展動作にて腰痛を生じる **Baastrups disease** が注目され、2004年 DePalma によると大学運動選手の 6.3%に発生すると報告されている。腰椎棘突起肥大が特徴の1つであるが、腰椎棘突起肥大の定義についての明確な基準はない。そこで今回我々は、腰椎棘突起高に着目し棘突起肥大について検討したので報告する。

【対象】

腰痛を主訴として当院を受診した 52名を対象とした。内訳は 20歳から 40までの若年群 26名、60歳から 80歳までの高齢群 26名であった。

【方法】

両群において初診時に撮影した腰椎側面X線像を用い、椎体中央高（以下 **VH**）、腰椎棘突起高（以下：**SH**）を測定した。**VH** は定量的椎体圧迫骨折評価法に基づき、椎体上縁・下縁の前後の midpoint を結んだ線とした。**SH** は **VH** の平行線を用い、棘突起上で最長となる値とした。測定部位は第 2?3?4 腰椎棘突起（以下：**L2SP**、**L3SP**、**L4SP**）とし、若年群と高齢群の **SH** を Welch の t 検定 ($P < 0.01$) を用いて比較した。

【結果】

若年群の **SH** の平均値は **L2SP** : 28.61mm、**L3SP** : 28.41mm、**L4SP** : 26.51mm、高齢群は **L2SP** : 32.95mm、**L3SP** : 32.01mm、**L4SP** : 28.04mm であった。**L2?3SP** にて危険率 1%未満で有意差が認められた。

【結論】

腰椎棘突起は若年群と比較し高齢群では肥大している可能性が示唆された。腰椎棘突起肥大が腰痛の一要因である可能性もあり、今後詳細な検討が必要であると考えられる。